

The Return of the Native 論

——リアリズム的伝統への挑戦としての悲劇の開花——

遠 藤 利 昌

(受付 2005年10月9日)

序

Thomas Hardy は、1912年の「ウェセックス版」の編集に際して、注を付け加え、*The Return of the Native* (1878) の第六編の中で描かれている Venn と Thomasin の結婚について、それは当初、意図していたものではなく、Venn はどこへともなく Egdon から消えていき、Thomasin は未亡人のままで結末に至る予定だったと述べている。そして、その原因を ‘certain circumstances of serial publication’ に帰し、‘Readers can therefore choose between the endings, and those with an austere code can assume the more consistent conclusion to be the true one.’ と、ハッピーエンドに終わる方を選ぶか、芸術的一貫性を選ぶかを読者に任せる形にしている¹⁾。もちろん、Hardy はこの注において、後者、つまり Eustacia たちの悲劇的な死で終わる結末が正当なものであると暗示しているのであるが、だからといって、読者は前者のハッピーエンドを、余計なものと考えてよいかなると、そうではない。

Mary Eagleton と David Pierce は、その共著の中で、19世紀の小説はハッピーエンドで終わることが義務的なものであったことを示し、‘No matter what strife or tragedies have torn the novel somehow in the last couple of chapters the good are rewarded, the bad justly punished, the divi-

1) Thomas Hardy, *The Return of the Native* (London: Penguin Books, 1999), p. 427. 引用はページ数を本文中のカッコ内に示す。

sions are healed.’と述べている²⁾。このことから分かるのとおり、19世紀リアリズム小説の役割のひとつには、勸善懲悪的なハッピーエンドへと向かいながら、可能な秩序をもった世界像を作り上げることがあったと言えるだろう。さらに、このリアリズムという形式について Peter Widdowson は、‘S/he may win or lose (comedy or tragedy), but the conception of the unified human subject always potentially self-determining is not affected. This presupposes a sensible universe — one which can be made sense of.’と述べ、リアリズム世界とは、ある個人が、理解可能な世界の中で、自らの「自己決定 (self-determining)」, つまり自分の決断によって生きているものとされていたと述べている³⁾。要するに、全ての結果の責任は個人が背負うもの、というのがリアリズムの根底にあるということだ。

このようなりアリズム観に従うならば、Venn の示す堅実で真面目な姿勢は、まさに彼への報いとしての Thomasin との結婚を正当化するものであり、Eustacia の死も当然のこと、ということになるだろうか。実際、後で詳述することになるが、このようなりアリズムによって肯定された Venn の示すような世界像は、テキスト前面に Eustacia を中心とした悲劇的世界が示されていたとしても、さらには、Hardy 自身が余分な結末と述べていたとしても、テキストの中で周辺に追いやられるどころか、テキスト全体に渡って、その爪あとを刻み込んでいる。すると、Venn と Thomasin の結婚は、単に、この世界像を支持した形で終わっているばかりでなく、テキスト全体が、依然として、ここで言う19世紀のリアリズム小説の役割を果たした形をとっているのである。

このように、*The Return of the Native* では、Eustacia に代表される悲劇的な世界が、一見、テキスト全体を排他的に支配しているように見えながら

2) Mary Eagleton and David Pierce, *Attitudes to Class in the English Novel* (London: Thames & Hudson, 1979), p. 12.

3) Peter Widdowson, *Hardy in History: A Study in Literary Sociology* (London: Routledge, 1989), p. 76.

も、同時に、19世紀のリアリズム小説の作法に則っともいる。これは Hardy の言うような二者択一的な選択に還元できない問題である。なぜならば、そのような読み方はテキストの重層性を否定することになってしまうからだ。とするならば、問題は、一見、余分なリアリズム小説の伝統に則った締めくくりの部分を取って付けたものと見なすのではなく、それ以前のテキストの部分にその締めくくりの必然性の糸を探っていきながら、どのような形で、それが悲劇的な世界と並存しているかを見ていくことではないだろうか。そのために、まず、一見、周辺化されているかに見える Venn の世界を前面に持ち出し、その実像を明らかにし、その後で、この Venn の代表する世界観が、Eustacia の悲劇的な世界から、どのような影響を受けているか、さらには、このような悲劇的世界像が Venn の世界の価値観を揺らがすような矛盾に満ちた存在となり、上に示したようなリアリズム小説の中で不安定要素になっていることを明らかにしていく。そして、それでもなお、なぜ最終節におけるリアリズム世界の復権が可能となっているかを見ていく。

しかし、注意しなければいけないのは、このような議論の中で検証しようとしていることが、悲劇としてのこのテキストの妥当性を問うことではないということである。なぜなら、Joe Fisher の言うとおりに、そのような議論自体、これから試みようとするテキスト中の矛盾の検証を無効化させてしまう恐れがあるからである⁴⁾。以下、便宜上、「悲劇」という言葉を使うことになるが、それはこのテキストの悲劇としての妥当性を云々するものではないことを述べておきたい。

I

Venn の職業は紅殻屋である。この紅殻屋という仕事は、足の先から頭の

4) Joe Fisher, *The Hidden Hardy* (New York: St. Martin's Press, 1992), pp. 82-83. もちろん、ここで Fisher が試みようとしていることには、マルクス主義的な立場に基づいたリベラル・ヒューマニズムに対する批判が根底にある。

てっぺんまで真っ赤という異様な風体になってしまう, 'Mephistophelian visitants' と呼ばれるような職業である。そして, その色は 'the mark of Cain' (79) とみなされ, 母親が子どもに対して使う脅し文句に使われるような恐ろしさを持っている。このように, Venn の見た目の姿は, 人々から恐れられるものとして描写されているのだが, そのためか, しばしば, この異様さは悲劇の舞台としての Egdon と結び付けられてきた。例えば, Jean R. Brooks は '(Venn) is dyed into an identification of the heath and its products.' と述べ, Venn を Egdon という舞台と一体となった人物であるとしているし⁵⁾, J. Hillis Miller も, この物語の舞台である Egdon という自然 (nature) とのつながりが最もつよい人間のひとりとして Venn を挙げている⁶⁾。

ところが, このような Venn の見た目の異様さにもかかわらず, それでは Venn のどこがその異様さと呼応しているのかというと, その表面上の部分を超えることはない。語り手が述べているように, 'The natural query of an observer would have been, Why should such a promising being as this have hidden his prepossessing exterior by adopting that singular occupation?' (14) と, Venn の異様な風体の下には, なぜそんな奇妙な職業に就いたのか訝りたくなるような好青年としての彼の姿がある。もし, Venn のその異様な姿が, 悲劇の舞台としての Egdon に同化するほど不可欠なものだとすれば, それは, まるで簡単に取り外せてしまう仮面のようなものでもあるのだ。

実際, これは単に赤色か, そうでないかというような表面的な問題だけではなく, 彼の人格という点でも同じことが言える。Venn は物語の最初から, 善良な人物として描かれているのであって, 外面的な異様さを除いて

5) Jean R. Brooks, *Thomas Hardy: The Poetic Structure* (New York: Cornell University Press, 1971), p. 179.

6) J. Hillis Miller, *Thomas Hardy: Distance and Desire* (Massachusetts: Harvard University Press, 1970), p. 92.

しまえば、メフィストフェレスの存在というには程遠い人間である。そもそも、Hardy が執筆段階の頃、*The Return of the Native* について、‘a story of country life, somewhat of the nature of “Far from the Madding Crowd”’⁷⁾と述べていることから分かる通り、John Paterson の指摘するような本格的な悲劇へと転換していく以前の、胚胎期における *The Return of the Native* は *Far from the Madding Crowd* から大きな影響を受けていた⁸⁾。Venn はその実直さや勤勉さにおいて、*Far from the Madding Crowd* の Oak を継承する人物なのである。

しかも、これはただ単に、根っこが同じというだけの問題ではなく、Oak と Venn を比較していくと、二人には大きな共通点があることが分かる。中でも重要なのは、二人がテキスト内の秩序を構築する役割を与えられているという点である。例えば、Oak が、愛する Bathsheba の世間体を考えて、社会的に正しい結婚へと導こうとする姿は、Venn が Thomasin と Wildeve を結婚させることで、なんとか Thomasin の世間体を保とうとする姿と重なる部分があり、それは物語中の彼の行動すべてにおいて言えることである。そして、なによりも、Venn と Oak の二人とも、物語の最後に、終始一貫して愛し続けた女性と結婚することで、今までの苦労が報われることであろう。物語内の破壊された秩序を、結婚という儀式によって再構築するという点でも共通しているのだ。このように、Venn はテキスト内の役割においても Oak の位置を引き継いだ存在なのである。

この秩序再構築としての Venn の結婚も、最終節になって突然、とって付けたように出てきたものではなく、それ以前の物語の中ですでに準備されている。その点が最も顕著なのは、Venn が着実に立身出世の道を歩んでいくということだ。紅殻屋としての Venn は、その異様な容姿と引き換え

7) R. L. Purdy and Millgate Michael, eds., *The Collected Letters of Thomas Hardy 1* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 50.

8) John Paterson, *The Making of The Return of the Native* (Berkeley: University of California Press, 1963), pp. 1-6.

に少なからぬ富を手に入れ、資産を増やしていつている。この資産を蓄える姿は、あからさまに描写されることはないが、水面下で着実に進行している。そもそも Venn の世界像とは経済的な観点抜きにして語ることはできないものだ。それは Egdon に対する彼の姿勢を考えてみれば十分だろう。Eustacia にとって Egdon は十字架 (86)、あるいは牢獄 (93) なのであり、自らの悲劇の一部となっていたが、Venn にとっての Egdon は違う。Venn が Egdon を徘徊する時、語り手が ‘since Egdon was populated with heath-croppers and furze-cutters rather than with sheep and shepherds, … his reason for camping about there … was not apparent.’ (147) という説明を付け加えるように、経済的な Egdon の有効性が顔を出してくる。これは Venn の利他的な側面を強調するために用いられていることもさることながら、Venn と職業的な利益の問題が切っても切れないことも示している。

そして、もし、このような Venn が経済的問題を度外視して Egdon へと脚を運ぶとすれば、それは Thomasin がいるからであった。実のところ、この愛する Thomasin への献身的な行動そのものが、彼の財産形成と密接に重ね合わされている。それは、二人がいよいよ結婚するという段階になった時、Thomasin が Clym に ‘(Venn) is much more respectable now than he was then!’ (385) と弁明していることから明らかであろう。物語最後における秩序構築としての結婚には、財産というあまりに世俗的な条件を満たすことが不可欠なのだ。このように、財産形成と結婚とは、コインの裏表のように密接な関係を持っている。この点においても、Venn と Oak が共通していることは言うまでもないだろう。両テキストは、勤勉さ、そしてその報いという、いかにもヴィクトリア朝的な道徳規範と進歩思想の中でリアリティを持った小説なのであり、Venn は Egdon というひとつの社会の中で、社会性を持った存在なのである。このような点で、この二人がたどった軌跡は、序の中で述べたようなリアリズム小説の作法に則った形をとっていると言えるのであり、*The Return of the Native* というテクス

トの中で着実に進行しているのである。

II

以上、リアリズム小説の伝統の枠内での Venn の姿を示すために、意図的に、悲劇としての *The Return of the Naive* から切り離して考察してみた。Venn は、単に、読者が期待していたパターンを踏んでいるという理由からばかりでなく、彼の勤勉で忍耐強い行動は、具体的な形で読者の意識レベルに訴えることによって、その後の立身出世に合理的な説明を与えるものとなったであろう。それは、当時に限らず近年にいたるまでそうだったろうし、その合理性の持つ説得力は、当時のヴィクトリア朝の中で強固なイデオロギーとして機能し、補強するものとなってきたと言えるだろう。さらには、このような秩序維持者としての Venn の世界像は、‘moral watch dog’ として、Eustacia に対して、さらにはテキスト全体に渡る評価基準としての作用も担うに至り、その勤勉さや誠実さといった性格は、それと反した Eustacia と比較され、ついには彼女を批判の対象となるべきものとみなされていく点も見逃してはならない⁹⁾。

だが、このような Venn の合理性は、一見、強固にうつるものの、テキストの中で限らない転覆の可能性に見舞われている。それは、Venn の克服すべき危機としてではなく、むしろ、彼が実践し、補強するところのイデオロギーに対する、根本的な不安定要素となっている。例を挙げるとするならば、あのサイコロ賭博の場面が格好の題材であろう。Wildevve との結婚後、金銭的に困っていた Thomasin に対して Mrs Yeorbright が、Christian を使いに出してお金を渡そうとする。だが、それを Wildevve が邪魔をして使いの Christian からサイコロ賭博でお金を横取りする。そこへ

9) Rosemarie Morgan, *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy* (New York: Routledge, 1988), p. 66. このような Eustacia に対する ‘moral watch dog’ としての Venn の役割に関しては、これ以上、この場で論じないので、詳しくは Morgan を参照していただきたい。

Venn が登場し、同じく、サイコロ賭博によって Wildeve が横取りしたお金を回収し、Thomasin のところにお金が渡るようにする、というのがこの場面の流れである。この場面は、まさにテキスト内の秩序構築者としての Venn の力が発揮されている場面と言えるのだが、そこには一抹の危うさがあるのも事実である。それは Clym に渡るはずのお金が渡らなかつたというような、後々のプロットの展開を左右する重大な出来事だったという意味ばかりではなく、この場面には、これまで述べてきたような、Venn の勤勉さとハッピーエンドの関係に見られる合理的な説明の余地がないということである。サイコロ賭博という偶然的な要素に展開が委ねられることで、Venn の世界の合理的な進展は不安定さに晒されている。この場面を支えているものがあるとすれば、それはこれまでのひたむきな Venn の姿に共感した読者の期待と、それを推し進めるための機械的なプロットの展開のみである。

このような Venn の合理性に対する不安定要素の存在の暴露は、その行動に対しても向けられる。先程述べた、見た目上の悪魔的な存在としての Venn と、その下にある善良な人間としての Venn との間にある矛盾に関して、John Hagan は ‘The clue to the meaning of Venn lies … in the fundamental goodness of the man’s heart and will combined with the “devilishness,” so to speak, of both his appearance and the perverse results of his well-intentioned actions’ と述べ、この矛盾自体に意味があるとしている。つまり、Venn のとる善意の行動が、結果として悪い方向へとプロットを導いていくことが、そのまま “heartless Circumstance” や “natural law”, そして “chance” といったものと結び付けられている、というのである¹⁰⁾。このような Hagan の見解は、もちろん、当たり前のように悲劇としての *The Return of the Native* と結びつけて導き出されているものであるが、この Venn に関する矛盾の指摘は示唆的でもある。つまり、勤勉さと賢明さを駆使し

10) John Hagan, ‘A Note on the Significance of Diggory Venn’ *Nineteenth-Century Fiction* 16: 2 (September 1961), pp. 147-155.

て行動する Venn のリアリズム小説内における合理性は、目的と結果の不
一致によって不安定なものであることが暴かれ、物語内における秩序構築
者としての Venn の存在意義を揺らがすものとなっていることを示してい
るからだ¹¹⁾。

このように、Venn が示したようなリアリズム小説内での合理性は、転覆
の可能性を孕んだものとして描かれているのだが、それが露骨に表れるの
が、Venn と Eustacia が接触する場面である。Venn は、Wildevve が Thoma-
sin との結婚を渋っている理由が Eustacia にあると知り、彼女のところに
直談判に行く。ここで Venn は、Egdon に住む唯一のレディーとして、Wil-
devve に他の女に目移りしないよう説教をしてくれ、と頼む。もちろん、
Venn は「他の女」というのが Eustacia 自身であることを知っており、それ
を隠して、暗にレディーとして当然あるべき振舞いを求めている。しかし、
このような社会性に訴えた Venn の願いは、Eustacia に届くことはない。
さらに、Venn は Eustacia が Egdon を出たがっていることを利用して、
Budmouth 在住の裕福な未亡人のコンパニオンの職を斡旋して Wildevve か
ら遠ざけようとするが、これもまたあっさりと断られてしまう (91-94)。
どちらの場合にせよ、Venn は、彼の知っている社会的な価値基準の枠内で
Eustacia を説得しようと試みている。それは Venn が道徳的人間であるか
どうかという問題よりも、彼を取り囲むイデオロギーの枠内で Venn が生
きていることを示している。その点、Venn の説得方法は、ある意味、常識
的とも言えるものであり、二人の間に共通の道徳的基盤があることを当た
り前のこととして頼んでいるのである。だが、このような Venn の思い込
みに反して、Eustacia は、そのようなイデオロギーに捕えられながらも、
そこに抑えきられることがないような存在でもある。この場面で現れてく
るのは、Venn と Eustacia の根本的な世界像のズレであり、Venn にとって
の Eustacia の理解不可能性である。Eustacia の説得に失敗し Venn は次の

11) このようなジャンルの混交性に関しては、Goode に詳しい。John Goode, *Thomas Hardy: The Offensive Truth* (Oxford: Basil Blackwell, 1988), pp. 38-60.

ように思うのだった。

The mental clearness and power he had found in this lonely girl had indeed filled his manner with *misgiving* even from the first few minutes of close quarters with her. But *a system of inducement* which might have carried weaker country lasses along with it had merely repelled Eustacia. (*Italics mine*) (95)

ここには Eustacia の態度に戸惑う Venn の姿と、普通の田舎住まいの女性ならば魅力的にうつるはずの道筋を、簡単に拒否する Eustacia の説明がされている。通常、理解可能な合理性を持った ‘a system of inducement’ の境界を逸脱した Eustacia は、まさに、Venn の世界像からは理解できないのである。さらには、彼の世界の秩序に不安定要素となる存在としての Eustacia が浮き彫りにされているのである。

III

だが、このような不安定要素は、テキスト内において、ただ野放しにされていることはない。それは巧妙に隠蔽され、一応の秩序回復が図られることになる。だが、このことを見ていく前に、ここで少し Venn から離れて Clym に視点を移してみよう。

しばしば、指摘されるように、Clym の言動は矛盾を抱えている。Clym は Paris での成功の道を放棄してまで ‘Native’ として Egdon へと戻ってくる点で、一見、Venn とは違った価値観を持った人物に見える。Clym は開拓に失敗した Egdon の荒地を見て ‘a barbarous satisfaction’ (173) を感じる人間である。さらには、‘To argue upon the possibility of culture before luxury to the bucolic world may be to argue truly, but it is an attempt to disturb a sequence to which humanity has been long accustomed.’ (172) というように、ひたすら立身出世に向かう Venn の示す進歩的姿勢とは逆の思想を持っている。しかし、このような思想にもかかわらず

ず、依然として Clym は、Venn の示すような価値基準から逃れているわけではないし、実のところ、Venn とさほどの違いのない社会的な価値基準を持ち込む人間として描かれていることも無視できない。それは彼が帰ってくるまでに、Thomasin が Wildeve との結婚が上手くいかなかったことを、この従兄弟に知られてしまうことを非常に心配していたことでも明白であろう。その点、Clym は Venn 同様、‘moral watch dog’ と同類の役割を果たしていると言えるのである。

このような Clym であるから、Eustacia を理解できない点では Venn と同様であった。眼を患った Clym は、泥炭刈りの仕事を始めるが、そのような中でも小唄を口ずさむことのできる彼の姿を見て、Eustacia は怒りをぶつける。だが、その怒りに関して、Clym は Paris にいた頃の ‘a fine gentleman’ (249) でなくなったことが我慢できないからと思っている。Clym にとって、Eustacia が Egdon を出て Paris に行きたがっていることは、その程度のうぬぼれにしか思えないのだ。もちろん、ここでの Eustacia は、そう簡単に一枚岩に解釈できない。Boumelha がこれまでの批評のあり方をまとめて述べているように、Eustacia は様々な要素の混交物とも言える存在である。だが、Egdon の社会から疎外された Eustacia との結婚によって、Clym も Egdon の社会から遠ざかっていくと Boumelha が述べている時、それは一面的な見方に陥っている。Eustacia からすれば、むしろ、Clym との結婚によって Mrs Yeobright や Thomasin などの社会の持つ価値観によって行動をすることを強いられていくのだ。このようなジレンマの中で、Eustacia の苦悩が存在することも忘れてはいけないだろう¹²⁾。

さて、このような共通した部分を持つ Clym と Venn であるが、二人にとって Eustacia の理解不可能性が頂点に達するのは、その死についてである。Eustacia の死が自殺なのか事故なのか、これまで様々な議論をよんできた。だが、ここでは二分法的な解釈や折衷案的解釈をとって、Eustacia

12) Penny Boumelha, *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form* (Brighton: Harvester Press, 1986), pp. 48–62.

の死を実証的な観点から検証するのではなく、テキスト中の登場人物、特に Clym と Venn、それに Egdon の住民を含めた人々の中に、それがどのような影響を与え、理解されてきたか、という点に焦点を当てて考えていく。

その前に、まず確かめておきたいのは、この Eustacia の死を伝える語り手の中立的な立場と、その伝える内容が Eustacia から離れて Clym や Thomasin, Venn の描写や心理に集中していることである。このことが後々の議論を巻き起こす原因になっているのだが、池に飛び込んだ Eustacia 以外の三人の人物に対する描写は、これとは反対である。この事件で死亡するのは Eustacia と Wildeve の二人である。それに対して生き残るのが Clym であり、この三人を池から引き上げるのが Venn である。Eustacia を除いた三人の生死を分けた原因については合理的な解釈が可能ないように描かれている。‘a dull sound’ (360) を聞いた Wildeve と Clym は、急いで堰に向かう。そこで Wildeve は外套を脱ぐだけの理性的な判断も失ったかのように、着の身着のまま堰へと飛び込んでいく。Clym の方はというと、Wildeve よりも ‘a wiser plan’ (361) を思いつき、ランプを立てかけて堰を回って浅瀬から入って行く。そこで、脚をとられて渦の中心へと引き込まれていく。最後の Venn はというと、一番、用心深く、厩の番人を呼びにやるように Thomasin に指示し、その後、水門のフタを浮き輪代わりにして、空いた手でランプをかざし救出に全力を注ぐ。こうやって見てみると、まるでこの三人の結末が、それぞれの行動の取り方によって決定されているように見えはしないだろうか。ここでも、合理的な読解の可能性を示すリアリズムの伝統の中にあることは注意しておきたい。

さて、そのような合理的な説明の可能性を残した中で、Eustacia の死は描写されることなく、不安定なままの状態に残される。それ自体が、合理性を超越した Eustacia の姿を示し、リアリズム世界を揺さぶる要素となっているとも言えるだろうが、問題は、Clym と Venn の二人が示す Eustacia の解釈である。まずは、Venn から見ていきたいが、彼の姿勢は次の一節に

要約されていると言ってよいだろう。

Venn soon felt himself relieved from further attendance, and went to the door, scarcely able yet to realize the strange catastrophe that had befallen the family in which he took so great an interest. Thomasin surely would be broken down by the sudden and overwhelming nature of this event. No firm and sensible Mrs Yeobright lived now to support the gentle girl through the ordeal; and, whatever an unimpassioned spectator might think of her loss of such a husband as Wildevé, there could be no doubt that for the moment she was distracted and horrified by the blow. (364)

ここには、Eustacia の死をどう理解してよいのか見当もつかないでいる Venn の姿と、夫の死によって動揺した Thomasin を支える ‘firm and sensible Mrs Yeobright’ がいないことを残念に思う彼の気持ちが自由間接話法によって描かれている。Mrs Yeobright が Venn や Clym 同様、Egdon に社会的な秩序をもたらす人間として描かれていることは言うまでもないだろう。Venn は、Thomasin のためにも、何とかして、この事件で引き起こされた衝撃を、Mrs Yeobright の示すような賢明で着実な思考力によって安定をもたらし、秩序を回復できないものかと願っているのである。だが、このような Venn の願いを、単なる Thomasin に対する愛情の問題として片付けてはならない。というのも、このように愛情という名の下に Thomasin へののみ関心が集中されることで、理解できない Eustacia の死が不可視化された状態になっているからである。事実、Eustacia の死に対する Venn の見解は、これ以上、テキスト内で言及されることはない。

このような Venn の姿勢からも分かるとおり、Eustacia の死が不可視化されたことで、遺された人間には、Venn のような解釈の回避を含め、自由にこの出来事を解釈する余地が残されることになった。中でも重要なのは、駆け落ちをした二人に対する道徳的判断が、一切、棚上げにされていることだ。Eustacia の亡骸が、威厳に満ちたものとして描かれているのは、こ

れまでのテキストの中での彼女の描かれ方からしても違和感のないものだろうが、Wildeve すら死という衝撃の前に威厳に満ちたものとして捉えられている。まさに、Venn の言葉を使うなら、この出来事は ‘strange catastrophe’ として、威厳 (dignity) という言葉とともに道徳的問題が不問に付されている。それは Eustacia に対する二人の理解が深まったというわけでもなく、むしろ、Eustacia の死の現場が見えないことによって、その原因である駆け落ち自体が不可視化された世界におかれてしまったかのである。

この点に関しては、Clym が格好の例を示してくれる。彼は、これで二人の女性を殺してしまった、と言う。だが、この Clym のあまりに道義的な見解に、疑問を感じる読者は少なくないだろう。しかも、このような自己否定の中で、Clym は道徳的問題を回避し、二人の死者に対する敬意という大儀のもとに、自らの価値観維持へと硬直化していつているとも言える¹³⁾。駆け落ちという道徳的価値観に背いた二人は、死によって裁かれたというだけでなく、遺された者が、その反道徳性を隠蔽し、都合の良いように解釈する機会を与えているのだ。

Venn らによって構築されてきた秩序は、何度も転覆の危機に晒されながらも、これまでテキスト内におけるリアリズム小説が持つ合理性によって守られてきた。それは、この第五節最後に至っても、生き残った登場人物たちの賢明さとその結果、そして、道徳的問題が回避され隠蔽されたことによって維持される道が残されることになった。このような点においても、余計なものとした第六節における Venn と Thomasin の結婚は、正当性を持つものとして、テキストによって裏付けられ、守られ続けているのである。

13) 上原早苗, 「盲目のクリム」『ハーディ研究 No. 29』(2003), pp. 1-14.

結 論

The Return of the Native は、Hardy のテキストを年代順に見たとき、初めて悲劇的ヴィジョンが明確に示されたものである、とよく言われてきた。これまで決定版と言われていた1912年の「ウェセックス版」に至るまで、Hardy がこのテキストに対して施してきたリヴィジョンの過程に関する研究が盛んなのも、悲劇的ヴィジョンの開花がどのような形でなされてきたのかという興味を掻き立てたことが一因にあるとも言えるかも知れない。

だが、本論では、このような従来の悲劇としての *The Return of the Native* 観から少し離れて、敢えて、リアリズムの伝統という中で読み直していった。そして、その中で、Eustacia に代表されるような悲劇的な世界が、どのような形で、このリアリズムの伝統を転覆させかねない要素になっているか、そして、テキスト全体に行き渡ったリアリズム的世界が、この転覆可能性を持った要素をどのように隠蔽していったのかを示していった。本論の立場としては、従来型の芸術性という観点とか、ひとつのジャンルに還元した観点から検証していくのではなく、この両ジャンルが並存するテキストの中で、どのように互いに影響を与えているのか、という観点から見ていったつもりである。結論としては、悲劇とリアリズムのジャンルの混交の中に、従来型のリアリズム小説の伝統からの脱却の意味が込められていた、ということだ。それは、これまで言われてきたような Hardy の悲劇的ヴィジョンの開花としての *The Return of the Native* というよりも、リアリズムによって創られてきた社会的な神話への対抗物としての悲劇とが並存したテキストと言うべきであろう。このような意味において、この小説は、Hardy の新しいヴィジョンが鮮明に開花された物語といえることができるであろう。

Summary

A Study of *The Return of the Native*

—Tragedy as a Weapon to the Convention of Realism—

Toshiaki Endou

When he revised *The Return of the Native* for the Wessex Edition in 1912, Thomas Hardy added a comment that the Sixth Chapter, which depicts the marriage between Venn and Thomasin, was an unnecessary one. After attributing the addition to ‘a certain circumstances of serial publication’, he continued that ‘the readers can ... choose between the endings, and those with an austere code can assume the more consistent conclusion to be the true one’. Of course, Hardy implies here the tragic end of Eustacia and other characters as an ‘austere’ ending. However, we can not swallow his comment and decide the happy ending as a needless one, especially when we take into account the Mary Egleton and David Pierce’s account of realism, which holds that for the Victorian novelists to end their stories happily was obligatory, saying ‘no matter what strife or tragedies have torn the novel somehow in the last couple of chapters the good are rewarded, and the bad justly punished, the divisions are healed’. If we stand behind their comment and see the fact that the text as a whole follows the convention of realism, we must be careful of Hardy’s comment.

However, the fact does not mean that we should choose one ending from them, that is, the tragic ending and the happy ending. Because when we see that while the text shows the tragic ending of Eustacia overall, we can also see the text obeys the convention of the realism. If we reduce the

problem to an alternative one, we fail to take the text's multilayeredness. So the important thing is that we should take the element of realism in the text seriously, and then ask why the text, which seems to endorse the tragic possibility exclusively, allows the convention of realism to be in the text and why it becomes possible for the happy ending to preside over the Sixth Chapter. In such questions, we can see how realism coexists with the tragic element in the text and where realism suppresses the subversive possibilities to construct an apparent happy ending.